「私たちと野生動物の共存について」

3年2組3番 幾野 慧 (共同研究者:舛谷マイア 前田春輝 内田優花)

１．はじめに

共存とは、お互いが損なうことなく、うまく同時に存在していくことを指す。果たして「野生動物」と「人間」が共存している姿とは何なのか。同じ場所・地域に生きることが共存なのか、それとも退け合ってでもお互い干渉せず生きるのが共存なのか。

高校一年生の夏、私が所属したゼミは「いのちの輝きを未来に伝える」だった。その時は今日に至るまで、日々悩まされることになるとは思ってもいなかった。何も知らず、知識もなかった当時の私は、その夏に知ったテーマについて興味を持ち、2年目3年目もこの問いと向き合い、貢献することを選んだ。当時、このテーマには大きな矛盾が生じていると私は感じており、たった数ヶ月では納得できなかった。そのゼミで初めて私が知ったテーマは、地元「奈良」の天然記念物でもあるシカをはじめとした野生動物と我々人間が今後「共存する」という姿の在り方を見つけることだった。私は3年間で、共存という言葉に向き合うことができただろうか。

２．序論

現在、「野生動物と人間の共存」が損なわれている。そのきっかけは明治時代に遡る。明治時代に、それまで減少していた鳥獣を保護するための捕獲規制が行われた。また、その期間において、家畜を守るためや毛皮を得るなどの目的でニホンオオカミを多量に補殺した結果、日本で唯一の高次捕食者であったニホンオオカミが絶滅してしまった。それにより鳥獣の個体数を減少させる要因がなくなり、結果としてイノシシやシカなどの野生生物の個体数は増加した。現在は増加したイノシシやシカなどが生息地域の幼木や木の皮、人間が育てている木の苗などを食べたことで、森林減少などの環境問題が増加している。またイノシシやシカなどが人里に降りてくるようになり、農家の農作物被害が増えた。この現状が続けば野生動物が被害を起こし、人間が野生動物を殺すという悪循環が進行することが懸念されている。そこで本研究では、奈良県内でのイノシシやシカ被害の防除に関する活動を体験するとともに、他県での先進的な事例を学ぶことで、野生動物と人間が共存できる社会づくりについて考察した。

３．本論

昨今、野生動物による農作物被害は、離農につながる深刻な事態となっており、野生動物と人間が共存しているとは言えない状況にある。その上この20年で国内におけるイノシシの個体数は約3倍に増えているにもかかわらず、それを駆除できる狩猟者は半減している。さらに里山に下りてきたイノシシによる人身被害や車両との衝突事故は後を絶たず、住民の日常生活を脅かす事態となっている。私たちは野生動物の生態系についてさまざまな知識を得ることで、ヒトと野生動物が共存できる方法が見つかるのではないかと考え、奈良県内でのイノシシやシカの被害防除活動を体験するとともに、他県での先進的な事例を学んだ。

A① 宇陀市における活動について

我々は宇陀市で行われている「かりつなぎ」というプロジェクトに参加した。(写真1～3)。林業や農業において、シカを中心とした鳥獣害被害は深刻で、日々の活動にも大きな影響を与えている。既存の解決策にも限界があり、新たな対策を構築することが急務となっている。

「かりつなぎ」とは、地域、森、畑、そしてシカやイノシシとが共生できるような森の循環を目指しているプロジェクトである。今まで狩猟に馴染みの薄かった方に狩猟を体験してもらい、これをきっかけに狩猟を始めたい方と獣害に悩む林業家・農家とを将来的につなぐことを目指したサー

ビスで、2022年度以降の本格的なサービス運用に向けた検討を行っている。貴重な「命」をいただき、私たちが生かされていることを再認識できることを目的とし、安全性などに配慮し、箱罠・くくり罠でのニホンジカなどの狩猟を参加者に体験してもらうイベントなどの企画を予定しているそうだ。

「かりつなぎ」で我々は実際に捕獲されたシカがどのようにジビエに至るのか見学した。参加した日に、偶然罠に捕まったシカがいた。我々が見学する中で、猟師の方が止め刺しをおこなった。その後シカの解体作業が行われた。初めての経験で、止め刺しは衝撃を受けることも多々あった。どこにも気持ちが腑に落ちず、終わってからも緊迫感を感じ、命と向き合う覚悟の必要性を知った。

写真1（左上）2（右上）3（左下）4（右下））

A②宇陀市における野生動物被害の現状と課題について

宇陀市の担当の方にどのような動物による被害が起きていて、現状の動物の生態系の傾向などの講義を受けた。現在、日本では環境省をはじめとした関係省庁が連携して鳥獣被害対策を実施している。国内において、野生鳥獣の令和二年度農作被害は約161億円にも上り、全体の6割をシカやイノシシが占めている。また、鳥獣被害により農家の農作意欲の減退や森林の下層植生の喪失等による土壌の流出などをもたらしており、被害額として数字に現れる以上に農山漁村に深刻な影響を及ぼしている。その被害の対策として国は、3つの柱を立てた。それは、個体群管理(捕獲)、侵入防止対策(柵の設置等による侵入防止)、生息環境管理(放任果樹等の伐採、刈払いによる餌場、隠れ場の撲滅)である。この3つの対策を地域ぐるみで、いかに取り組めるかが重要だ。個体群管理の取り組みにより令和二年度、イノシシの捕獲頭数は68万頭、シカは67万頭が捕獲されているがまだ目標頭数には達していない。しかし、年々捕獲頭数は上がっている。現在その捕獲された殆どの動物が焼却処分されている。

そんな中、廃棄されるシカやイノシシを食用として活用するジビエが注目されている。ジビエのメリットは高タンパクで低カロリー、そして何より命を無駄にしないことだ。また、農村地域の所得向

上と、被害の低減も期待される。そんなジビエは食品衛生法に基づく営業許可を取得した施設において解体されていなければならないため、国内では135万頭の捕獲頭数に対し、食肉処理施設における処理頭数はわずか約12万頭である。販売可能な国産ジビエ認証施設は全国でわずか29施設しかない。

宇陀市では「かりつなぎ」のような地域の活性化を積極的に行なっている。しかし、宇陀市ではジビエ加工の割合が捕獲したイノシシの1割未満にも満たない。また、猟師によって処理されることなどが原因で捕獲数は明確ではない。

B 生駒市での活動について

獣害被害防止の活動の一助となれないかと、高校に近い生駒市に協力を申し出た結果、生駒市が管理する市民農園の柵の設置をする計画に参加させていただけることになった。山間部の市民農園ではイノシシが出没し、農作物被害を防除するため、市民農園すぐ横の山の麓に柵を設置するのだ。私達は柵を設置することで現在の人と野生動物の衝突が軽減され、今後の共存にも繋がるのではないかと考えた。そして柵を設置する事で実際に被害は減るのかという検証も行った。

イノシシ用に特注された柵を使用し、畑沿いに設置した。柵はイノシシの強力な力により、掘り起こされてしまう可能性があるので、下の方は網目が鼻を入れてもあげられないように狭くなっている(写真4)。また、柵が噛みちぎられないようにという対策もかねている。 溶接された部分が取りづらいように畑側に溶接した部分を向けていた。柵の端の部分は崖と、市民農園の他の利用者の畑に繋がっていた。柵は生駒市の税金で設置されている。

この経験を通して、柵の設置には多くの時間と労力と費用がかかることがわかった。また、柵の設置は野生動物の農作物被害が減らせるのか、という検証を長期的に観察する必要性があると考えた。

C日本での先行事例

くまもと農家ハンターという、地域の農業を鳥獣被害から守り、地域を活性化させる活動を行っている団体がある。この団体が行なっているものには主に三つの事がある。まず一つ目は銃を使わず里に降りてくる野生動物を捕獲、または駆除するようにしている。これにより人間と動物の共存に繋げている。次に被害を受けている農家の多くが狩猟免許を取得し、狩猟に参加している。この試みにより狩猟者が少なくなっている現状に対応し、円滑に獣害から地域の農業を守る事に貢献している。最後に、テクノロジーを活用し勘や経験に頼らないという新しい試みを行なっている。結果、野生動物の出現場所を予測できるようになったり、捕獲されたことを瞬時にわかるようになった。また捕獲された野生動物は駆除するしかなく、そのあとどのように処分するか課題が残る。しかし、この団体では、独自の国産ジビエ認証施設をもっており、捕獲した個体をジビエとして活用することができる。具体的には皮は革製品、人間が食べれる部分はカレーなどの食品にし、赤み部位はペットフードに骨は保護犬に寄付している。そして、余った部位は堆肥、飼料に利用している。彼らは全国で数少ない国産ジビエ認証施設に認定されている。

・考察

「かりつなぎ」で我々は、殺すという選択は、手段として簡単な事だが、実際我々の目で見ると、このままでいいのかと感じることがあった。それは、猟師さんの罪悪感を持ちつつも殺さなければいけないという使命感や、動物は決して悪くないのに殺さなければならないという現状も汲み取ることができて心苦しくなった。

説明を受けながら、食用として活用できる肉の選別が行われた。得られたジビエは、昼食で頂くことができた。シカ肉をしゃぶしゃぶで食べるというなかなかない経験もさせていただいた。さっきまで死んでいく姿を見ていたが、約1時間後には私達は肉として食べていた。臭みがなく、栄養豊

富で食べやすかった。この経験により野生動物が沢山殺されているという現実を受け入れ、殺すことが共存に繋がっているのか、殺される数を少なくするためにはどうすればいいのか考えた。
　ジビエは根本的な問題解決にはなっていないが、狩猟した動物を食べることが、動物にとって生きた意味を見出すことができるのではないかと考えた。

4. 結論

　現在、野生動物と人間が共存する手段は野生動物を殺すのではなく、畑の周りに柵を設置することが最善だ。しかし、経済力や労働力を考慮すると、現実的には継続するのが難しい。そこで、くまもと農家ハンターが行っている活動のように野生動物の個体数を減らすため駆除したものをジビエとして活用することが良いと考え、この活動を奈良県内でも実行するべきだと提案する。具体的にこの活動において重要となるのは、加工処理施設の開設、野生動物の死骸を堆肥に変える堆肥化機械の設置である。これらは高額であり入手困難だが、クラウドファンディングをする事で解決するのではないかと考える。
　生駒市民農園の柵の設置によって農作物被害が減ったかどうかはまだ不明であるため、現状の柵の効果を見る必要があると考える。

5. おわりに

「殺されてしまう尊い命を、せめて無駄な死にならないように」と解決策を探し求め日々活動したこの1年半。辿り着いたのは死に無駄も何もないということだった。野生動物にとって幸せとは「長く」生きることである、と人間である私は思い込んでいたが、果たして本当にそうなのか。野生動物の気持ちを知ることはできない。野生動物と人間との共存は、双方が望む目標だと思い、活動してきた。しかしこれは思い込みで大きな間違いだった気がする。私は本研究を進めていく中で、共存とはあくまでも人間が図々しく理想としているものであって、にとって共存とは、生きていく過程でとても邪魔なことである気がした。生態系の中に人間が無理矢理綺麗ごとのように共存したがり、そのせいで生態系自体がかき乱されていると気付かされた。
私はグローバル探究で相手の立場になって考えることの重要性に気づけたと思う。野生動物という相手の立場に立っていたように見えて、人間は何も相手のことを考えて行動してこなかったように思う。本研究を進めるにあたって出会った方々は、野生動物の立場にも農作物被害に悩まされている地域の方々の立場にも立ち、自分にできることはないかと、模索しておられた。私は彼らのような大人になりたいと思った。ある事実について持論を展開する前に、もう一方の立場になって、一見するとわかり得ないバックグラウンドなどの情報も得た上で考える。当たり前のことかもしれないが、たとえその結果自分の答えが相手に対して賛同ができないという結論に至ったとしても、自分の考えを提示し行動するべきだと思う。一方の目線ではいくら綺麗で都合もよくて、融通も効き快適になっても、もう一方の目線に立ってみるとその方にはその方なりの考えや歴史、これからの生き方のプランがある。大きな視野になって問題を見た時、果たしてこれらは出来ているのか。今後私は、一度立ち止まって考えられるような人になりたい。

6. 参考文献・出典

論文 「野生生物」との共存を考える(<特集>「野生生物」との共存を考える）
著者: 丸山康司 ; 出版者: 環境社会学会 ; 出版年月日: 2008-11-15 ; 掲載雑誌名: 環境社会学研究. (14) ;
高槻成紀(2006)「野生生物と共存できるか」 株式会社　岩波書店
田口洋美(2016)「シカ問題を考える」株式会社　山と渓谷社

7. 謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。森庄銘木産業株式会社森本様、宇陀市役所農林商工部農林課廣田様にはご指導を賜りました。ここに深謝の意を表します。また、生駒市役所農林課農林係の方、並びにくまもと農家ハンター様には、探究活動にあたりご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。